Hokuriku University

北陸大学　紀要
第14号　(1990)
pp. 1～16

大麻文化科学考

(その1)

山　本　郁　男*

A Study on the Culture and Sciences of the Cannabis and Marihuana

Ikuo Yamamoto*

Received October 18, 1990

第1章　はじめに

「光があふれ，気温もだいぶ高くなった。少し体を動かしただけで，汗ばむ季節である。こうなると，麻がいい。麻にかぎる。水分の吸収，発散の速さは抜群。繊維も丈夫だ。麻を発見し，麻の衣を身にまとった先人の知恵を改めて見直す」と平成2年5月28日の天声人語にある[1]。

しかしながら，一方，この麻(あさ)は，現在では「大麻(たいま)取締法」[2]の対象となり厳しく，その栽培と使用が規制されている。

著者は過去15年間にわたって，この大麻を研究の素材とし，主に薬理学的あるいは毒性学的観点から追究している[3-5]。

1973～75年，著者は米国サンフランシスコ市に在った。市の西部に位置するゴールデンゲートパークは太平洋岸の砂地を見事に甦らせた広大かつ美しい公園として世界的に有名であるが，ここはまたヒッピー族の発祥の地としても世界的名高い。hippieとはジャズ用語のhip＝調子を合わせるが語源ともいうが，hipped＝魅せられた。また，happy＝幸福，が崩れたともいう。彼らの主張は「自然に帰れ」であった。

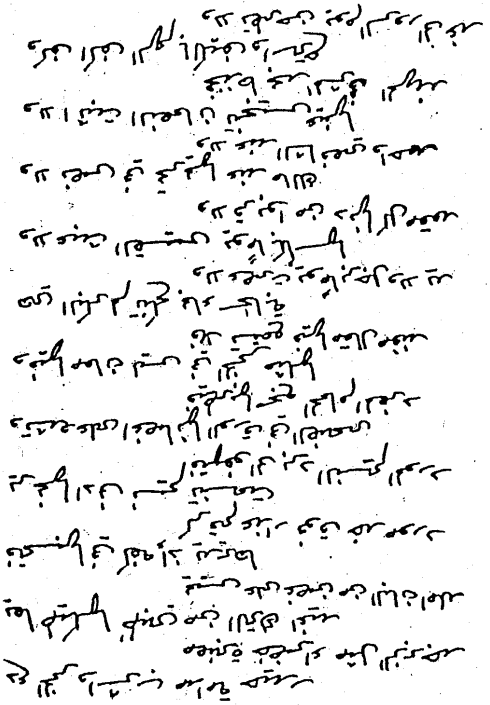

Fig-1 Hashish（ハシッシュ）を称えるアラビアの詩 …悩みを忘れ…との意がかいてある。

＊薬学部衛生化学教室
Faculty of Pharmaceutical Sciences, Department of Hygienic Chemistry

NII-Electronic Library Service

Hokuriku University

その彼らがたむろする公園で私は，後に知ったのであるが多数の若者が大麻を吸っているのを目撃した。踊る者，寝ころぶ者，拠りかかる者，様々な若者の生態をみて私は文化とか文明とか，あるいは科学，そして技術革新とは何か等々を大麻を通して考えるようになった。

と同時に，留学先の主任教授，世界的モルヒネ研究者 E. Leong Way 博士から「Marihuana and Its Surrogates」[6] を読むように推められたことも本研究を始める動機の１つに数えられる。それまで私は「催眠薬の研究」に携わっていた。後述するように大麻の歴史はBC. 3000とも5000年にも溯るといわれる。植物学の分類ではまれにみる一属一種，この特異的な植物に全知全能の神は繊維として，食物として，はたまた薬物としての３つの機能を与えた。以後，各章にわたって大麻の全貌を私見をも混えて，文化，科学の両面からとらえ，この文化的にも，科学的にみてもユニークな一植物にスポットライトを当ててみたい。また，それに値する“植物”であると確信する。

第２章　大麻の文化

手元の辞典[7] によれば「文化」とは，“人間が，その精神と肉体とを働かせて，生活を豊かにするように作る努力とその所産。科学，芸術，宗教，道徳など”とある。従って，この定義に添って筆を進めることにする。

第１節　大麻の起源

「大麻（たいま）」は別名，「麻（あさ）」と呼ばれる。語源はラテン語，ギリシャ語の kannabis 大麻に由来し，管（クダ）を意味する。英語では広く cannabis が用いられている。Cannabis は後に，インド大麻の開花頂部の乾燥物を指すと共に，乾燥した草のことをいうようになった[8]。これとは別に hashish（ハシッシュ）とか，marihuana（マリファナ）という呼名がある。現在，我が国では，大麻，マリファナ，ハシッシュが新聞等で汎用されているが，必ずしも正しい使われ方をしていない。その名は幻覚作用をもつ主成分[21]，テトラヒドロカンナビノール（THCと略す）の含有量の多寡による。大きく分けて，１）最も安価で効果の弱いものを通常，ブァング（bhang）という。これが日本のジャーナリストがいう，マリファナ，大麻のことである。米国などから持込まれる乾燥大麻，野性のものや栽培されたものが混在しており，時には茎も入っているなど品質は一定ではない。２）栽培された大麻から採取されたもので未熟の果穂及び葉が主体をなす。かなり注意深く選別されている。これをガンジャ（ganja）という。３）最良質の樹脂でありチャラス（charas）という。もっと正確にいうとこれがハシッシュ（hashish）である。（Fig-１）

一方，マリファナはメキシコ・スペイン語では marihuana, marijuana と綴るが，これは女性名の Maria Jauana（Mary Jane）の短縮形でポルトガル語の marigango＝興奮剤から転化したとの説がある。催淫作用を意識しての名と解される。最終的には Maria＋Juana＝Marihuana 又は Marijuana となったと推察される[9]。

現在でも，世界各地において多くの名称が使用されている[10, 11]。例挙するとインド，中央アジアでは乾燥し成熟した葉や花穂を既述のように Bhang（バング）。乾燥し成熟した葉のみに対しては特別に Savi（サヴィ）。花穂及び結実した部分を Ganja（ガンジャ），樹脂を Charas

NII-Electronic Library Service

Hokuriku University

（チャラス）とかDawamesk（ダワメスク）と呼ぶ。全草に対しては国によって異なる。Kannabis, Cannabis（アラビア・イラン），Kafour, Banji（イラン），Shesha（イスラエル），Kobak, Asarath, Nesh（トルコ），Magoun, Madium（シリア），Hashishel Keif（レバノン）Kamonga（エジプト），Dagga（南・南西アフリカ），Njem（西アフリカ），Lebake（ズール,スワヒリ），Vongony（マダカスカル），Bangue, Suruma（モザンピーク），Mávron（ギリシヤ），Anascha（ソビエト南部），Hanf（ドイツ），Gandia（モーリシヤス），Ganga（ジャマイカ）などその地域によって多彩な呼び名がある。このことは大麻の分布と使用がその国々の文化の様態を示していると同時にその移動の過程が分かる。乾燥後粉砕し，タバコに混ぜる習慣のある西インド諸島やメキシコでは前述のMarihuna, Marijuanaの他，Mariguana, Rosa marihuana, Hemp, Muggles, Reefers, Indian heyなどと呼ぶ。この場合，全草。特に花穂及び葉は，後に文明国家である，アメリカ合衆国，カナダ，イギリスに持込まれ，大きな社会問題になっていることは，先に略述した通りである。

大麻は学名，*Cannabis sativa Linne*，今日でも多くの書物や邦文の学術書はクワ科（*Moraceae*）としているが，これは誤りである。クワ科は乳管を有しているが大麻にはないことから，最近の欧米の学術書には全て大麻はアサ科（*Cannabinaceae*あるいは*Cannabacea*）に変更された。このことについてはさらに詳しく分類の項で述べるつもりである。前述の幻覚，麻酔作用があるBhang, Ganja, Charasと呼ばれるインド大麻は*Cannabis sativa L. var indica Lamarck*という大麻の一変種である。このものは日本薬局方第１改正に登場して以来，65年間，第５改正（1886～1951年）まで，鎮痛，鎮静薬として収載されていたものである。又，*Cannabis ruderalis*という他の変種がソ連に於いて1924年に発見されている。これは生理的変種であり，現在のところ，大麻はあくまでも単一種属（Family）であるとの説が一般に認められている[4]。

原産地はカスピ海の東，中央アジア及びバイカル地方であるとされている。ここを中心として世界各地，温帯北部から熱帯地方，五大陸に広まった雌雄異株の一年生草木。世界で最古の繊維作物でもある。（Fig-２）

Fig-２　大麻の栽培（栃木県鹿沼．著者写す）

NII-Electronic Library Service

Hokuriku University

言うまでもなく，文化は充分な食が得られ，衣と住が備わって，生活が安定した場合に大きく発展する。麻は既に若干ふれたように食として，衣として，時には薬としての利用価値を有する植物であり人類の歴史において，まさに良きにつけ，悪しきにつけまさに文化をつくった類まれなる植物といえる。これはケシ *Papaver somniferum*（ーケシ科 *Papaveracea* 原産地：地中海沿岸，2年生草木，未熟の果実より得た乳液をアヘン（阿片）という。麻酔，鎮痛，鎮咳，催眠作用を有すー）と比肩する特性を持っている。固有の地域に生まれた文化圏には主食となる主導的作物（米や麦）と補助的に生活を守る植物遺伝資源（粟，ヒエ，キビなど）が必要とされるが麻はこの両者にまたがる存在といえまいか。また野生大麻を栽培化した当時の人類は高い文化的素養をもっていたともいえる[12]。

パビロフは世界を8つの地域，後に4つを加えて合計12（東アジア，東南アジア，南西アジア，中央アジア，近東，地中海，アフリカ，ヨーロッパ・シベリア，北アメリカ，メキシコ・中央アメリカ，南アメリカ，オセアニア・太平洋の諸島）に分け栽培植物の起源地を定めている。

大麻の原産地，中央アジアは北緯26～55度の間にまたがっている。南に天山山脈，東にパミール高原，西にカスピ海。植性からいえば高山性植物帯及びステップ地帯からなる。隣接の近東文化，中国北方文化，インダス文化の輸入により，強い影響を受けていた土地でもある。

人間の歴史はラマピテクスから1000万年，アウストラロピテクスより300万年，いわゆる現代人の出現からは4万年と云われ，野生植物を栽培し始めた時期はBC 7000～10000年前とされている。チグリス，ユーフラテス河畔の農耕文化はこの間のBC 9000年頃に栄えたという[12]。

著者の想像では，大麻は最初は繊維として栽培されたが，麦等の主食が不作時，種子が救荒作物の1つとされたのではないか。ところが，その種子に麻酔，鎮痛などの作用があったことが見出されたために，薬物としての利用が始まったのではないか。従って，繊維としてはBC 7000年。食物としてはBC 7000～5000年。薬物としてはBC 5000年頃以降からと考えられる。

古来，中国では麻の実は五穀の1つに数えられ，三草四木の三草の中に紅花，藍と共に入れられている。因みに四木とは桑，うるし，こうぞ，苧をいう。麻の種子は，現在でも麻の実，苧実と呼ばれ，七味唐辛子，鳥の飼料として販売されてもいるが，20%程度のタンパク質，30%の脂肪（これをアサ油，タイマ油という）を含んでいるなど栄養としては申し分ないものである。大豆がタンパク質35%，脂肪20%であることからもハトや小鳥が喜ぶのも首肯されることではある。

世界をアルコール文化圏と大麻文化圏とに分ける興味ある学説がある。後者は発展途上国に属し，大麻の吸飲を過去数千年間にわたって続けている。先に記述した，大麻に対する呼称が様々な例挙した国々がそうである。常用者の数は現在2億とも3億人ともいわれている[10]。Fig-3の写真はネパール，カトマンズでみられる大麻販売店の広告であり，“For best Nepalese Hashish & Ganja. We are always at your services”という文字がかかれている。文明国家の現状を思うと驚きを禁じえない。

ここで大麻を使った“Garawish”というインド料理を紹介する。これは粉末にしたhashishにシロップ，ケシ及びダツラを混じ，エッセンスや香料を加えて，火熱して料理する。菓子として食する。又，ネパールでは;Manqul”という“hashish”にゴマ油，ココア，チョコレート等を加えてよく手で混ぜ，最後に香料を添えた食物がある。市場で自由に売買されたり，食さ

NII-Electronic Library Service

Hokuriku University

れている国は，勿論，政府公認であり，インド，ネパール，ブータン，アフガニスタン，レバノン，モロッコ，コンゴなどがある。繊維作物として，今でも栽培されている国は，ソビエト，ルーマニア，イタリア，ポーランド，ハンガリー，アメリカ，日本などである。ソ連，中国では繊維をとった後の種子を多量に日本に輸出している。大麻は救荒作物であることから，雑草のような強い植物であり，あらゆる土壌，気候，環境に育つ。従って野生大麻も多い。アジア，アメリカ，アフリカ，と殆んどの大陸に自生。特に，原産地として既述したカスピ海沿岸，コーカサス地方，ヒマラヤ山系，中国各地，また日本では北海道地方に多い。北海道衛生研究所では毎夏，この野生大麻を伐採，焼却する作業を続けているという。

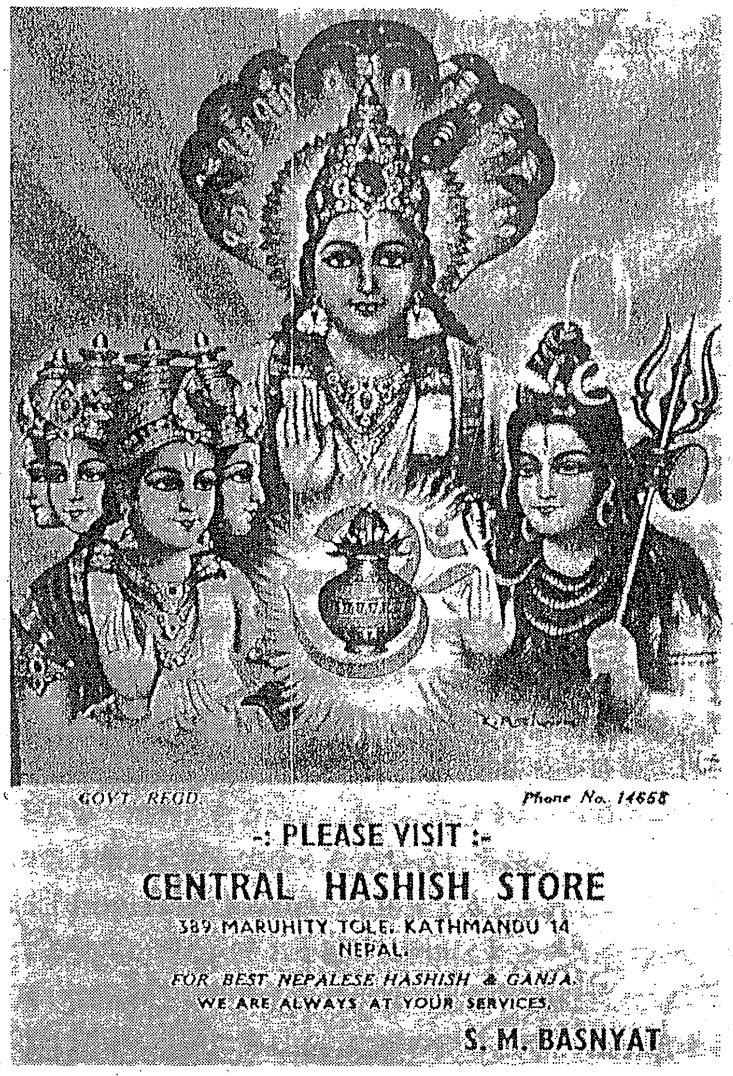

Fig-3　ネパールの街でみかける大麻販売店の広告[14]

第2節　世界の大麻事情

歴史上，最初に大麻についての明瞭な記載がある文書は，BC 1400～900年インドのアザルバ・ベータである。その後インドのエル・ヤ・サルスタというインドの古典にも大麻の記述がみられる。BC 6～7世紀のイランに伝わるゾロアスター教の経典ゼンドアヴエスタ≪Avesta≫には「大麻は幸福の源なり」と書かれ，冒頭に述べた大麻吸引を習慣とするヒーピー族の語源がhappy，幸福にあり，そのヒッピーが大麻を吸うということは非常に面白い。考古学的にはトルコのアンカラの古墳から大麻が出土，BC 800年頃と推定されている。また，BC 650年アッシリアの楔形文字板に大麻の記録がある。さらにBC 500年インドのバラモン教の聖典ヴェーダに大麻樹脂や，花穂の記載がある。

これらの歴史的事実の背景には幾つかの文化が挙げられる。

大麻を薬物として，また繊維を目的とした栽培文化を形成したのはBC 500年頃，イラン高

NII-Electronic Library Service

Hokuriku University

原に栄えたアケメネス王朝（ペルシヤ時代）である。ペルシヤ文化の特徴はイラン高原の地理的な優位性を生かした天文学，占星術（エルブース，ザグロスの２つの山脈の中間にあるイラン高原の空は透きとおっており天体観測に最適であった。）であり，シルクロードの西の端に位置していることから中国文化との交易によって，本草学や医学が発達した。この中に大麻が存在したことは疑う余地はない。

これに関して，ギリシヤの著名な歴史家，ヘロドトス（BC 484年生まれ）の記述がある。彼によると大麻を最も古く生活の一部として用いたのはペルシヤ文化よりもやゝ早く発達したスキタイ・サカ文化であるという。スキタイ人は南ロシアのスキタイ，シベリアのアルタイ山地にテント生活を営む，遊牧騎馬民族である。彼らは大麻をテントの中で燻じて快楽用に，また，戦争や政治的にも利用していたらしい。アルタイ山脈（現在の中国，ソ連国境カガフ共和国の東部）の奥地のバジリクという地に多数の古墳が発見されたが，この中に多量の大麻種子が見い出された。ヘロドトスの記載ではスキタイ人はその王の死体を埋葬するとき，ミイラとして側室の１人を陪葬する習慣があるとするが，これは後にソ連の考古学者によって記載通りであることが明らかにされている。即ち，スキタイ人は赤熱した石の中に大麻を投入し，身体を潔めたと考えられる。数ある墳墓の全てから大麻の煙を出す石製の装置や大麻種子が発見されている。このバジリクの古墳の建設はBC５～４世紀と比定されたが，この根拠は，前述のペルシヤ文化のアケメネス王朝の芸術品とスキタイ・サカ文化の使用遺品の数々が非常に良く似ていることから確実視されている。このスキタイ人もBC３～２世紀の匈奴の西方侵入によって，やむなく西シベリア地方に移動したと考えられる。この時代，大麻はトロイ戦争を通じて東アジア，あるいはロシアを経て東アジア，逆にヨーロッパと長い年月を費いやして大麻は伝播したと想像される。

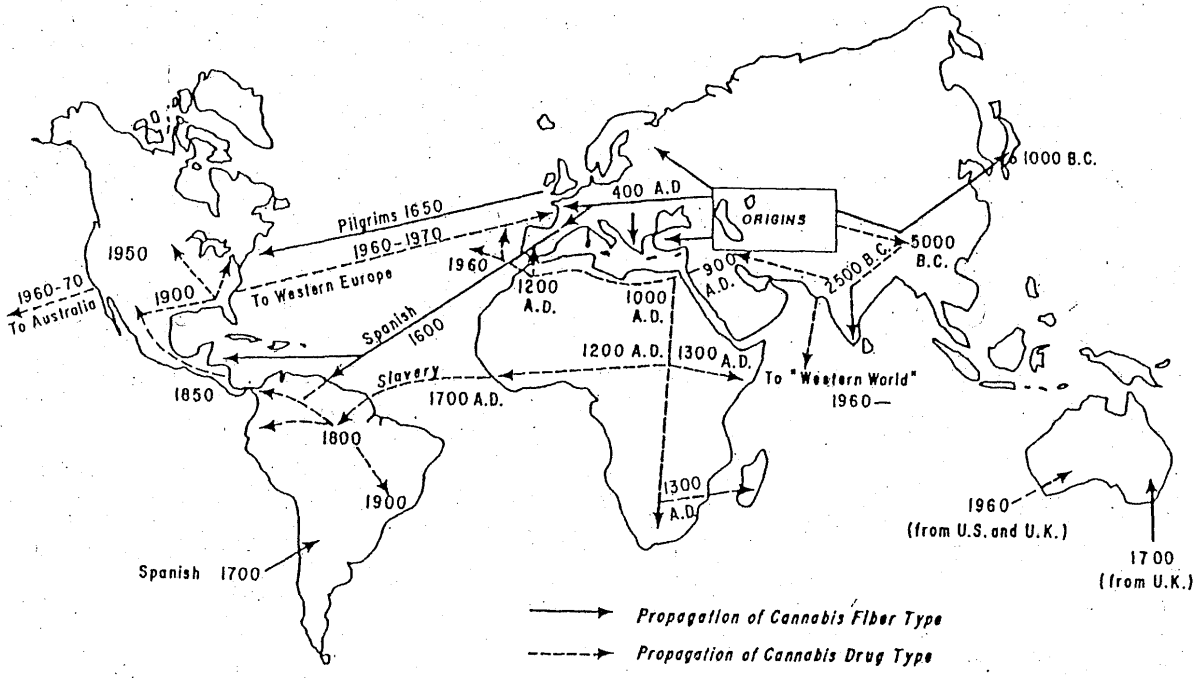

Fig-4 The propagation of Cannabis sativa, drug and fiber type, throughout the ages.

Fournier (1979)[9-10] はこの伝播をFig-4のように示し，大麻には繊維タイプと薬物タイプ

NII-Electronic Library Service

Hokuriku University

の２通りがあるとしている。我が国にはBC 1000年頃に繊維タイプが入ってきたと考えられる。しかし，日本では不思議にもこれを薬物として摂取するという習慣を持たなかった。この理由として九州大学薬学部の西岡教授の提唱[20]があるが，これについては後の節で述べる。

また，大麻はイスラム教では宗教的な秘儀に使用され，アランビアンナイト（インド・ペルシヤや近東諸地方の物語集，千夜一夜物語）にもしばしば大麻を愛用した場面が描かれている。BC 100年頃にはイランの民族宗教の神官（アギという）の間で大麻を荒行，幻術の目的で用い，大麻吸引によって得られる幻夢を利用して人の一生や国の未来を占ったという。この幻術を基礎として発達したものが古代イラン医学であり，大麻を主剤とした麻酔薬によって外科的手術を行ったという記録もある。アギの幻術は後に中国医術として発達する。

イランからインドに伝播した大麻は，カシミールやヒマラヤ南部に定着栽培された。しかし，この地方の麻は活性成分の含有量が非常に高く，他の繊維作物である綿花が土壌，気候とも適合しており大量に作られたことも原因となって大麻は繊維としてではなく薬物としての価値をもつようになった。これが有名な既に述べた「印度大麻」である。麻と綿との運命的な対比と分岐点がここにあったのである。ヒンズー系や回教系のインド医学ではその麻酔作用を利用しての催眠，鎮痛などの目的でよく大麻を用いた。

一方，６世紀の後半，イスラム教によって民族的統一をあたえられたアラブ人はイラン，シリア，エジプトをも征服した。８世紀末のビザンチン帝国は大麻の使用をイランから北アフリカを経てスペイン，さらにフランク王国を経由して北欧へと拡げていった。11世紀に入っての十字軍の遠征は13世紀まで続いたが，これによって大麻が繊維以外の利用を伝承していったことは確かである。10～11世紀，ペルシヤに Hashshâshin という土民の暗殺団が組織され，大麻を吸煙しては他民族，特に白人を攻撃，殺害したという。また，十字軍も大麻を吸煙した兵士が多くの略奪と残忍な殺人をキリスト教徒に対して行ったという。英語の assasin（刺客）はアラビア語の上記の hashshashin（drinkers of hashish）に由来するとされている。大麻には本質的に狂信的な行動にかりたてる作用があり，それを戦斗に利用したと考えられる。これは第二次世界大戦時に覚せい剤を用いて敵艦上に自爆した我が国の突攻隊に酷似してはいないか。興味あることに，ナポレオンはエジプト遠征に際して，大麻の使用を兵士に厳禁すると同時に，大麻の害毒について科学的調査を行うように命じるなど，大麻が軍隊という集団行動に対してどのように影響するか非常に関心を持っていた。事実，マリファナ中毒患者がかなりいたと考えられ，18世紀から19世紀にかけて，母国フランスでは社会問題化しており，これにともなってヨーロッパ全域に拡まった。

この影響があってか1840年代に入って，急に芸術家達の間で大麻吸引の風習が流行した。この契機は，ジャック・モロー（パリ一の精神医学者）である。彼は「大麻により私は全くの幸福感を味わった」と自身の体験を記している。1844年，フランス・パリのホテル「ピモダン」において「大麻クラブ」が誕生。出入りした芸術家の中には，ゴーティエ，パルザック，ボードレール，デューマ，などがいた。デューマ著「モンテ・クリスト伯」の中には，大麻の媚薬的効果を記述した個所がある。いわゆる Drug novel が流行。フィッツ・ヒュー・ルドルフによって「大麻食用者」という本まで出現している。

19世紀末，メキシコに大麻が大流行したこともあって，20世紀の初頭，アメリカにあっという間に流入した。これに悩んだアメリカ政府は大麻の使用を禁止する案を国際連合に1952年提

NII-Electronic Library Service

Hokuriku University

出。ジュネーブ国際アヘン条約の中で，アヘンと共に大麻の取締り規則が制定された。1929年，アメリカでは16州で大麻の使用が法的に禁止となっている。我が国の「大麻取締法」は戦後2年，1947年に初めて制定された。その後，国際連合の麻薬委員会においても，しばしば大麻問題がとりあげられ，遂に1961年，「麻薬単一条約」が成立，ここに大麻が国際的な規制を受けることになったのである。「大麻」はベトナム戦争の影響下にあった米国の若い兵士の間に拡がり，さらに冒頭にも記述したようにヒッピー族を主とする若者間に大麻の乱用が激増，その他の文明国にも波及していることは言をまたない。共産圏であるソ連でも大麻取締は日本よりさらに厳しいという。

我が国では既述のように，古くから大麻は栽培されていたにもかかわらず吸煙の習慣はなかったが，昭和52年以降，大麻吸煙によって検挙された者はついに毎年1000名の大台に乗り，大きな社会問題となっている。今や，大麻は世界的にモルヒネ，コカイン，LSD－25と共に「乱用性薬物」という言葉を生み，その中で大きな注視をうけている。

第3節　我が国の大麻

地質年代によれば，洪積世と沖積世の境は約10,000年前の頃と考えられるが，この頃に日本列島は最終的に大陸から分断された。大陸とつながっていた時代は，大陸から人類や動物，それに伴っての植物の移動もあったが，縄文時代以後になると，大陸との交流は当然のことながら海上を通じてなされ，人間と文化が舟によって運ばれた。

大麻が我が国に入ってきた時代は，Fournierによれば Fig-2 に示されるがごとくBC 1000年頃と考えられる。この根拠は，縄文時代の遺跡とされる千葉県木更市の菅生遺跡から土器と共に大麻の種子の化石が多数発見されたことによる。縄文土器文化は新石器時代BC1000年以後とされているので，この頃，大陸から持込まれたと推定される。その後，時代は下って弥生式時代の遺跡とされる山口県下関市綾羅木及び名古屋市西志賀貝塚からは出土品に麻布の押した模様がくっきりと認められる。いわゆる組織痕土器，布目土器といわれるものが見出された[22]。このことからも古代先住民の衣生活で重要な位置を麻は占めていたと思われる。

大麻の茎皮からとった繊維は麻布や絲とされる。耐水性，耐久性，通風性に優れているため獣皮と共に古代人にとって身にまとう衣類として用いられた。また，道具をつくり，住環境を整えるための紐類として重宝されたに違いない。獣皮を使っての靴などは麻の絲で結んだり縫ったりしたのであろう。生活必需品の1つであった。

3世紀に著わされた「魏志倭人伝」[23]，正しくは「三国志」－「魏書東夷倭人」の条には麻は出ているのであろうか。この書は文字のな

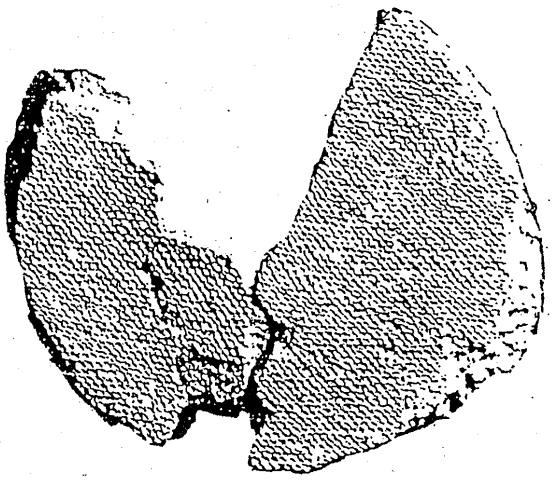

Fig-5　麻布の圧痕と考えられる土器底部[22]

NII-Electronic Library Service

Hokuriku University

かった我が国の先史時代の情況を記録として残している中国の唯一の文献である。この中に「……作衣如単被，穿其中央，貫頭衣之。種禾稲紵麻，蠶枚緝績，出細紵○緜……」という個所がある。すなわち，「禾稲（いね），紵麻（苧麻）を種え，蚕桑・絹績（つむぐこと）し，細紵（麻の織物のこと），○（かとり，絹の織物），緜（まわた）を出す」と記している。しかし大麻とはない。卑弥呼が魏に贈ったものとして斑布（班布）という布がある。しかしこれが麻布なのか判然としない。倭人伝の記載された日本は２世紀前後であるとすると弥生式時代の中期であり，先の菅生古墳や西志賀貝塚の麻布（平織）の組織痕文の発見とも考えてこの紵麻は大麻をも包括する広義の麻ではなかったのか。

これに関連して，縄文晩期とされる滋賀県大津市滋賀里遺跡には土製の紡錘車が出土している。ということは，当時すでに手編みの段階から明らかに機械を用いる織物技術により，小幅の手織をかなり多量に作っていた可能性がある。静岡県の登呂遺跡では苧麻（チョマ）から平織した布片自体が発見されている。以上のことから当時は恐らく大麻と苧麻が併用されていたと考えられる。因みに，苧麻はイラクサ科（*Urticaceae*）の多年生草木で和名をカラムシという。大麻よりも繊維が細く美しいので，あるいは先の斑布とは苧麻のことかも知れない。広義の麻（あさ）にはチョマのほか，コウマ（黄麻），アマ（亜麻），マニラ麻，シザル麻などが含まれる。

時代は下った奈良朝時代には大麻（アサ）が各地で栽培されていたことが明確である。その証拠として，いくつかの文献がある，「万葉集」，「常陸風土記」，「古語拾遺」，「播磨風土記」等が有名であるが，中でも「播磨風土記」には明らかに大麻であることが記されている。すなわち，麻の汁によって幻覚症状を呈し中毒死したという話である。先の苧麻にはこのような作用はないので明らかに大麻が栽培されていたことになる。「万葉集」には次のような和歌や挽歌がみられる。

麻衣（あさごろも）　着ればなつかし　紀伊の国の
妹背の山に　麻蒔く　我妹

白たへに　飾り奉りて　うちひさす
宮の舎人も　たへのほの　麻衣（あさごろも）着れば
夢かも現かもと　曇り夜の　迷へる間に　あさもよし

大麻はアサであるが，これは朝に通じ，対照的に，木綿はユウといい夕に通ずる。前者を衣草，後者を草綿（キワタ）といった。

民謡の１つ，「催馬楽（サイバラク）（馬子歌）」には次のようなものがある。

夏引の　白絲　七量あり
さ衣に，織りて着せむ
汝妻離れよ　頑なに　もの言ふ女かな
汝麻衣（あさごろも）も　我が妻のごとく　袂よく
着よく肩よく　小頸　安らかに
汝着せめかも　縫ひ着せかも

NII-Electronic Library Service

Hokuriku University

如何に麻が庶民と共にあったかが明瞭であろう。一寸粋な歌ではある。

まどうまで眺めよとての　すさびかな
麻の狭衣　月に打つ声

さらに712年，大安万侶による「古事記」には「天の岩戸」や「へら坂の少女」の条に記載がある。「古語拾遺」(807年）には，神武天皇の頃，阿波の国（現在の徳島県）で忌部氏によって大麻が栽培されたとある。麻の栽培は俗に“燕(ツバメ)が最初に飛んできた時に，種子を播き，蝉の鳴き声が止んだ頃に引き抜く，初秋に茎をとり，皮から繊維を採取する”。これをこの時代，苧（お）といった。

苗字や地名は麻の使用分布を示す，もう一つの証左となる。

苗字には「麻(アサ)」を初め，「麻井」，「麻下」，「麻田」，「麻畠」，「麻地」，「麻王」，「麻木」，「当麻」，「麻布」などがある。

地名には徳島県の「大麻(オオアサ)」のほか，麻倉（三重），麻布（静岡）(新潟)，麻生（茨城），麻生(おえ)（徳島），麻績(おみ)（長野），美麻（長野）など枚挙にいとまがない程である。

麻の一般的な特徴として，1）強度は非常に大きく，綿より強い。湿潤すると15～20％も強度が増す。2）吸湿性，放湿性共に優れ，着用してもむれない。3）涼感があり熱伝導性は綿より大である。繊維が太く，接触面が大なるゆえに夏期の衣料材料に適す。高温多湿の日本では格好の素材であったに違いない。奈良，平安，鎌倉，室町，江戸，明治，大正，昭和と麻は綿，絹に押されながらも現在まで，その用途によって使用されているのである。

麻の製品には，糸，網，綱，下駄の鼻緒の芯，畳糸，魚網，帆布，衣服用麻布，ズックなどがあるが，その需要は化学繊維にとって代わられて，今日では次第に特殊な用途に限定されている。例えば神式儀式（天皇家の司祭など）には麻製品は絶対に欠かせぬものである，かみしもやお祓いに用いる幣（ぬさ）は麻布であり，御輿，御旗などに用いる綱は全て麻である（図－6）。一切，化学繊維のロープや紐類は用いられていない。

ここで麻にまつわる2つの話を提供しよう。1つは江戸時代，旅に出る時，麻布の端ぎれを身につけ，道中の神社に奉納すると無病息災という風習がある。他の1つは麻でつくった衣類は赤子に着せると麻のようにすくすくと真直に育つという。これはきっと麻の成長が極めて早く，どんな土地でも成育することにあやかったものであろう。伝説によると忍者，猿飛佐助は庭に麻の種子を播き，その成長につれて毎日跳ぶ練習をしたということからもわかる。事実，我々の栽培の経験でも1週間に72cm成育し，最終期の体高は310cmに及ぶ。Fig-7は北陸大学薬学部薬用植物園において1988年の栽培時の大麻の生長の記録である。5月20日播種。図の黒丸－実線は直播群，白丸は苗床群である。6月5日に発芽。直播群の方が苗床群よりも生育が良く，この植物がいかに環境に強いかを改めて知った。その生命力の強さは，いかなる気候変化にも，地質の肥沃，不毛とは関係なく成長し，一粒の種子が鳥などによって運ばれゝば，その場で育つ。北海道立衛生研究所薬学部長，金島弘恭氏らは毎夏，道内の野生大麻の根絶のため，伐採を行っているが「引き抜いても引き抜いても翌年にはまた生えている」と今年も慨嘆していた。こんなに生育の良い大麻をもっと悪用するのではなく有効に使えないものかと私は真剣に考えている。

NII-Electronic Library Service

Hokuriku University

大麻の種子は，現在では食料とはなっていないが，調味料として有名な“七味唐辛子”や“御飯の友”の中に麻の実が使われているし，また，ペットショップに行けば，ハトやカナリヤなどの鳥の飼料として売られている。さらに油はペンキの塗料として利用されている。

後章でも詳述するが，麻の種子は麻子仁と呼ばれ非常に緩和な下剤として，現在でも薬局で売られ，老人，虚弱者，大病後の便秘時に，強い下剤の使用が不可能の場合に用いられている。その他，利尿減少，乳汁不足，月経不順，熱傷（ヤケド）などにも適用される。

ここで麻を用いた諺の１つを紹介しよう。これは中国の荀子勧学にあるもので，「蓬生麻中，不扶而直」日本語では「麻の中の蓬（よもぎ）」という。“真直な麻の中に生えた蓬は，麻の直きに似せられて，自ら直くなる。“人間も善人に近づけば，その良き感化を受けて善人となる。悪人に混われば，悪人となる”との譬に引用される。

先にも若干ふれたように，我が国では3000年にわたって大麻と共に日本人は生活して来たのであるが，その国民性の故か，大麻を吸煙，吸飲する習慣を持たなかった。お盆会の迎え火，送り火には麻の皮をとった残りの芯を乾燥させたものを焚く習慣はあったのに，スキタイ民族のようにはならなかった。吸引の習慣は第二次大戦後（1945年昭和20年）米軍の駐留により，その基地周辺で若い兵士や労働者が吸煙したことに端を発している。日本人は元来，外来の文化を受けつぎ，移入して発展して来た文化国家であるが故に一つの流行として，煙草と同じ感覚で受け入れたきらいがある。

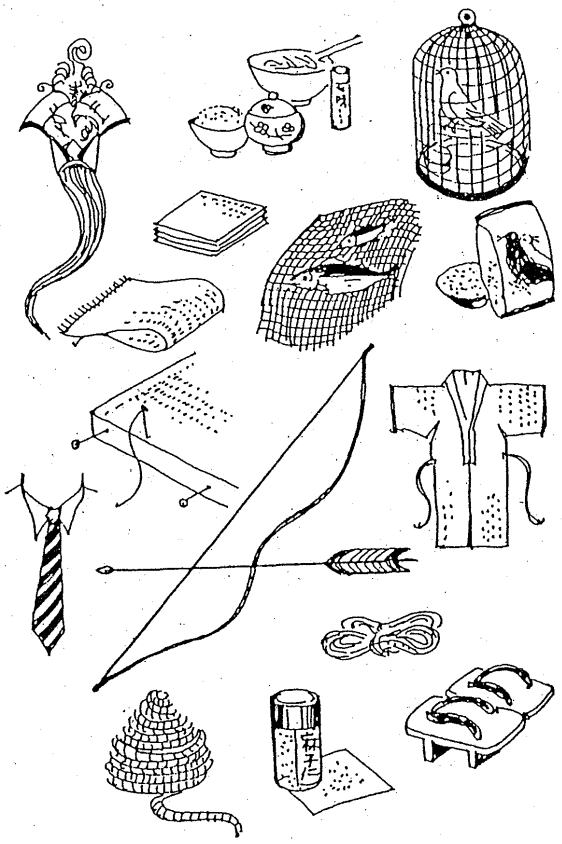

Fig-6　麻の製品の数々（著者のイラストによる）

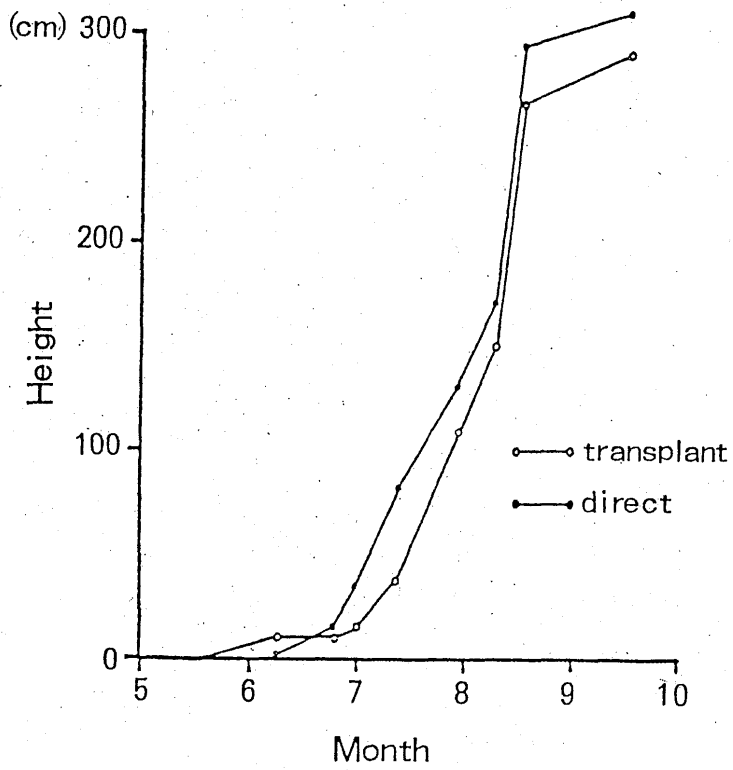

Fig-7　Record of Growth of Cannabis

NII-Electronic Library Service.

Hokuriku University

日本人が何故，大麻を長く吸引しなかったことについて九州大学薬学部，西岡五夫教授[20]は以下のような興味ある理由付けをした。すなわち，既述のように大麻は一属一種の植物であるが，いくつかの生理種が大略，2つある。それらは，麻酔性の強いTHCA種（テトラヒドロカンナビノール酸，Tetrahydrocannabinolic acid）と麻酔性の殆んどないか，あっても少ないCBDA種（カンナビジオール酸，Cannabidiolic acid）であり，前者は薬物型（Drug type），後者は繊維型（Fiber type）と呼ばれている。交配実験の結果，THCA種はCBDA種より優性であるが，CBDA種はTHCA種から隔離栽培を行うと比較的長くCBDA種を保持することができる。CBDA種の中にTHCA種を播くと遺伝形質がCBDA種に移されることが判明した。これらの実験は^{14}C－THCA及び^{14}C－CBDAを用いて確認されている。

日本における，大麻栽培の歴史は非常に古いにもかかわらず，宗教的秘事や快楽の目的に用いられなかった事実は，BC 1000年頃に移入して来た日本古来の大麻（つまり麻（アサ））は麻酔性の強いTHCA種ではなく，繊維型のCBDA種のみであったと推定されている。事実，大分県大山町は山間地であり交配の機会がなかったため，1358株中828株が，CBDA種であった。西岡教授はFig-8のようにアサの移動と分布を示している。中国の大麻もCBDA種であり，ヨー

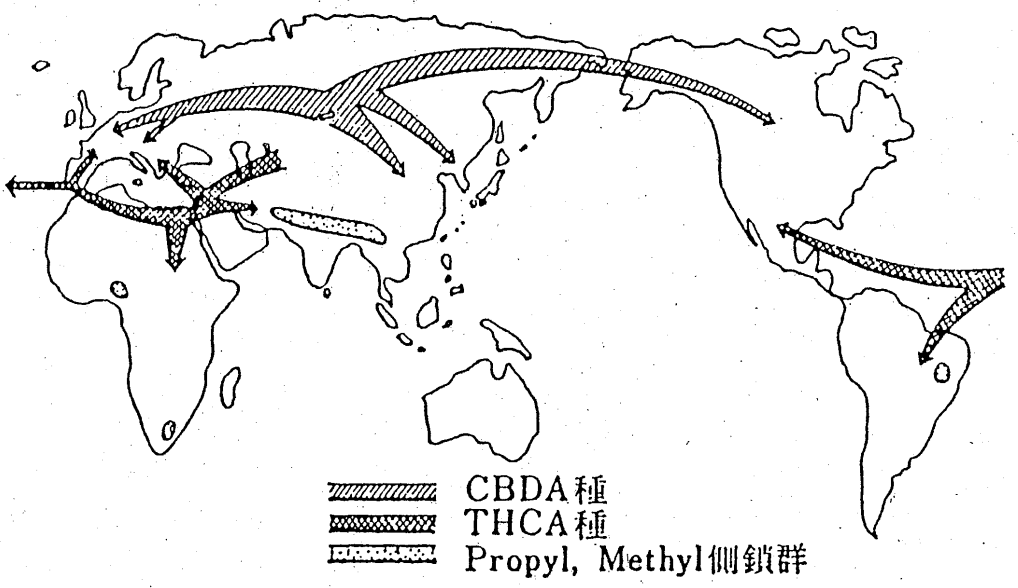

Fig-8 アサの移動と分布[20]

ロッパの中北部や北米（カナダ）の麻もCBDA種が含まれていることから，北半球北部の温帯，亜寒帯の国々の大麻は元来CBDA種であったと考えられる。因みに現在，我が国の栽培大麻は全てCBDA種である。Fig-9は我が国における大麻の栽培の年次推移をあらわしたものである。昭和29年に栽培者数37,313人で栽培面積3,109ヘクタールあったものが昭和61年ではわずかに251人，32ヘクタールという有様である。

著者は3年程前，我が国の国内産の9割とも言われる最大の大麻栽培を行なっている栃木県巨摩郡鹿沼に，栃木県衛生研究所の世取山守博士の案内で訪れたが栽培農家の戸数も著しく減少，古老の語る言葉は「栽培が国家によって奨励された戦前，戦中に比べると，昔日の感が

NII-Electronic Library Service

Hokuriku University

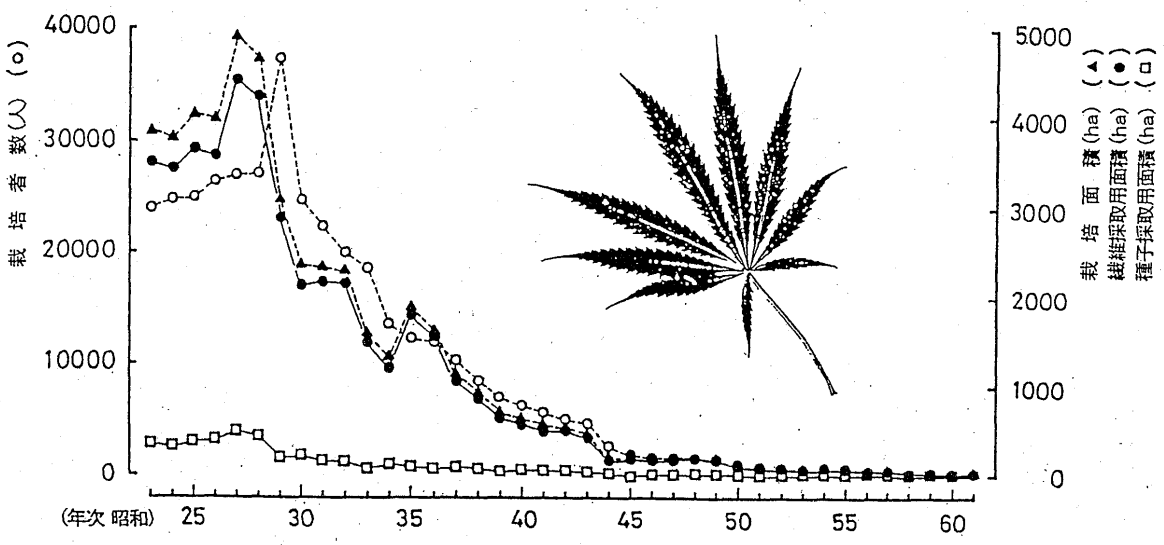

Fig-9　我が国における大麻栽培状況

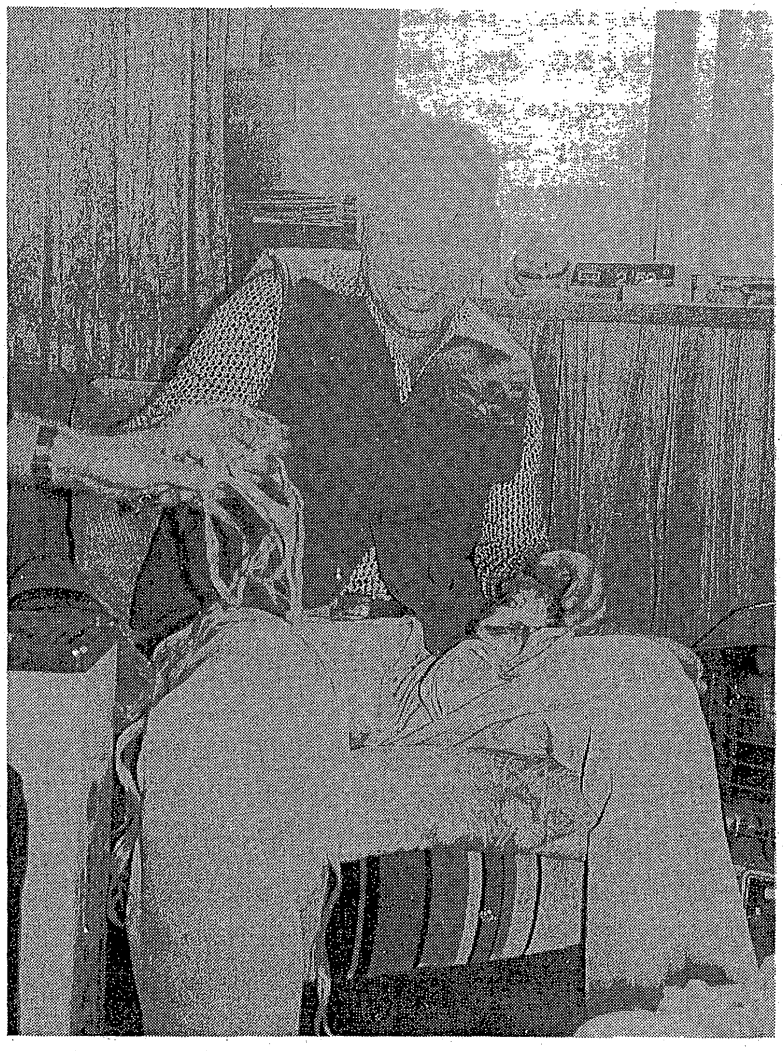

Fig-10　栃木県鹿沼の大麻栽培者，麻糸を手にし説明する古老A氏（著者写す）

NII-Electronic Library Service

Hokuriku University

ある」とのことであった。(Fig-10写真) 納屋の中には赤く錆びた麻の茎を茄(ゆ)でた大釜が淋しく放置されていたのが印象的であった。

謝 辞

本研究は渡辺和人助教授，成松鎮雄，松永民秀，樋田洋子助手並びに恩師，吉村英敏教授(九州大学薬学部) ほか多くの協力者によって遂行され，また，現在もなお続行中のものである。ここに深謝する。

参考文献

1) 朝日新聞，天声人語．平成2年5月28日朝刊 (1990).
2) 大麻取締法，昭和23.7.10法律124号．改正，昭25－法18，昭27－法152，昭和28－法15，昭29－法71，昭38－法108，昭45－法111.
3) 山本郁男，吉村英敏，「大麻成分の代謝と薬理作用」(総説)．衛生化学 (日本薬学会) 28 233－248 (1982)
4) 山本郁男，「大麻の幻覚作用」(総説)．日本薬剤師会雑誌 37 1061～1071 (1985)
5) 山本郁男，「大麻成分の代謝と薬理－毒性」(総説)．薬学雑誌 (日本薬学会) 106 537～561 (1986).
6) "Marihuana and Its Surrogates" ed by M. dev. Cotten, E. Leong Way and H. Isbell Pharmacol. Reviews, 23 261－380 (1971).
7) 武田祐吉，久松潜一編，角川国語辞典．角川書店，東京 (1958).
8) 立川 清編，医語語源大辞典．東京図書刊行会 昭和61年．(1986).
9) "The Marihuana Papers" ed by A. R. Lindesmith and D. Solomon. New York. The New American Library Inc. (1968).
10) G. G. Nahas "Marihuana－Deceptive Weed" New York, Raven Press (1973).
11) 大麻 (CANNABIS) 編集，依存性薬物情報研究班．(加藤伸勝) 厚生省薬務局麻薬課委託 昭和62年 (1987).
12) 小沢正昭，"食と文明の科学"．東京，研成社，昭和56年 (1981).
13) 一戸良行，"毒草の雑学"．東京，研成社，昭和57年 (1982).
14) L. Cherniak, The Great Books of Hashish Volume BI: Book I, Morocco, Lebanon, Afghanistan, the Himalayas. Published by And／Or Press, Berkeley. California. (1979).
15) マリファナ・ナウ，マリファナ・ナウ編集会．北川 明，㈱第三書館，東京 (1981).
16) マリファナ・ハイ，マリファナ・ハイ編集会．北川 明，㈱第三書館，東京 (1989).
17) 山本郁男，"マリファナ周辺の話題"．薬事のひろば，第24号 p.7 (昭和60年)．石川県薬剤師会発行．(1985).
18) 中原雄二，薬物乱用の本．p.73 研成社 (1990).
19) 一戸良行，麻薬の科学．p.115 研成社 (1987).
20) 西岡五夫，大麻の研究．ファルマシア 11 327 (1975).
21) 植木昭和，ネズミの行動にみるマリファナの作用，麻薬と人間．細谷英吉，大村裕編．p.176 (昭和49

NII-Electronic Library Service

Hokuriku University

年）時事通信社．(1974)．
22）図説日本文化の歴史(1)先史，原史．p.122　小学館（1979）．
23）石原道博，和田清 編訳，魏志倭人伝．岩波文庫（1970）．

NII-Electronic Library Service